

農村から新しい生活様式を考える

第六回

農村において「農村らしい暮らしを送る」ということ

国立大学法人 信州大学農学部 助教 小林みずき

「農村で暮らすこと」「は」「農村らしい暮らしを送ること」と必ずしも一致しない。山林や田畑に近いという環境こそ都会とは異なるが、農村にいてもモノや情報はすぐ入手でき、都市部から距離こそあるが移動も容易く、職種によっては仕事も難なくこなすことができてしまう。このような現代社会の状況を前提に、本特集のテーマ「農村から新しい生活様式を考える」を捉えてみたい。

信州大学農学部のある伊那キャンパスは、南箕輪村という南信地域に位置している。村にあるというだけでも珍しいが、全国の大学の中で最も標高が高いことから「最高学府」を誇っている。筆者はそこから車で四〇分ほどの町に暮らす農村住民の一人である。農村地域で暮らし始めたことで、農村に暮らす人々

こそ、自らの暮らしや、自身が住む地域の良さを見直すことが求められていると感じるようになった。これまでの経験も振り返りながら、農村に暮らす人々と「農」の関係に注目することで「農村らしい暮らし」を考えてみたい。ここで登場する事例は、小林（二〇二二）に詳細が掲載されている。あわせて参考にさせていただきたい。

1. 都市での暮らしと農村での暮らし

— 「理想」と「現実」 —

筆者は東京で生まれ、都内のマンションで長年暮らしていた。周囲に水田、畑、ビニールハウスがよく馴染む長野県の伊那谷

へ越してきたのは七年前、まだ新型コロナウイルス感染症が蔓延する前のことである。通勤手段が電車から車に変わり、運転に慣れるまでは苦労したものの、通勤時間は短縮され、満員の電車で苦しい思いをすることはなくなった。それとは引き替えに、気軽に駅ビルや映画館へ立ち寄れなくなり、今までの友人と会う機会が減った。ただ、これらは新しい生活様式というほどのことではない。買い物もたまに行く直売所を除けば農産物をはじめ食料品は近くのスーパーで買うことが多く、それ以外はネットショッピングである。

最も大きな変化となったのは長年のマンションでの生活を卒業したことだろう。住むことになった初めての一軒家には庭どころか畑がついており、住む前から野菜をつくろうと意気込んだ。今まで出会ってきた農家さんのようにいかなくとも、私だって農学部出身であり、現役の教員である。多少のノウハウを持って挑んだつもりだった。種や苗を植えるところまで、そこそこ順調だったのである。しかし数週間、数ヶ月後を経て、その成果は非常に残念なものであった。数年は作目を変えながらチャレンジを繰り返したものの、最終的には自分で栽培するのを諦めた。

自分が思い描いた「農村での暮らし」を実に甘く見ていたことに気づかされる。今まで出会ってきた農家の方々はそのつなく

こなしているように見えたが、そこに至るまでには長年の蓄積があったのである。「自給的な農を営むこと」というのが実は簡単ではないことを思い知った。「新規就農」と比べれば、農地確保や資源調達の大変さは全くの別次元であるが、暮らしの中で自給的な農を続けることにもハードルが存在し、筆者にとっては思いのほか、その道は困難だったのである。

二 若手農業者の暮らしがぶり

もちろん周囲の全員が私のような人間ばかりではない。農村に暮らししている人を弁明するため、コロナ禍で本格的に畑を始めた同僚の話もしておこう。お酒を飲みに行く機会を失い、時間ができたために畑しことに精を出すようになり、畑が忙しい、畑が楽しいと話していた。今年もクラカケ豆をもらい、お酒のあてにと美味しい食べ方を教わった。

だからこそ余計に、野菜づくりを挫折した経験に対し、自責の念を抱かずにはいられなかった。しかし、こうした実情は自分だけではなかった。長野に移り住んでから、県内の若い農業者の方々に調査でお世話になった。それまでは比較的、年配の農家の方々中心に話を聞くことが多かったが、三〇代四〇代の同世代の農家さんの多くはお会いする日程を調整いただくのさ

え難しかった。インタビューで日常の暮らしぶりを伺い、その忙しさに圧倒された。「日々忙しくて、加工や手芸をする時間などはない。丁寧な暮らしに憧れる」と未就学児を育てながら、夫と農業経営をする女性が話す。

これが農村に住んでいる若手農業者の実情であり、悲痛な声であった。親に保育園の送り迎えをお願いして、なんとか出荷や梱包、配達作業が回っているという。その働き方、生活の様子を聞いて、共働きの両親のもとで育った子供時代を思いだした。農業経営と日々の忙しさゆえ、四〇歳代以下の農業専従者では自ら自給用の畑で野菜を作る人はいなかった。親世代とともに農業をしている場合には、親が自給用野菜の栽培を担当していた。

自分（筆者）も何かと忙しい日々を送っているのだから仕方ない。これは言い訳のようだが、現役の農業者でさえ難しいのである。果樹農家の女性が、野菜のつくり方はわからないと言っていた。自らが農を営めるようになるには、時間の確保もさることながら、知識や技術の習得が必要なのである。

三．農家さんの「食」のこだわり

野菜づくりと同じように、私にはもう一つ農村生活において

憧れるものがある。それは「農産加工」である。筆者が農家さんのもとへ調査で通うようになったのは修士の院生になった夏頃であった。同じ山や田畑でも訪れるたびに違う表情をすることに感動を覚えた。しかし、筆者は何よりも農家さんの「手作り」のクオリティの高さと、食の豊かさに圧倒され、魅了されたのである。お茶のお供に、と出てくるお漬物、干し柿、リンゴやイチジクのコンポート、栗の渋皮煮のおいしさたるや。「これはどこで売ってるんですか?」と尋ねると、その場には全員に笑われた。その理由がすぐにはわからなかった。「売っていない、作ったの。あとでレシピなら教えてあげる」と返答があった。お金を出しても買えないという事実にはショックを受けると同時に感銘を受けた。

それ以降の調査では「ご自分で作ったんですか?」と尋ねることにした。レシピと原料をいただいて帰り、菓子や漬物を作ったこともあった。しかし、レシピ通りに作ったとて、再現はできなかった。明らかに違う。見たり、聞いたりする分には簡単を感じる作り方も、実際にはたくさんのコツがあり、熟練の技があるのだ。学習した筆者は「また来ますので、その時は作っていただけませんか?」とお願いすることにした。行くたびに出てきたのは、その都度違う手作りのお茶菓子とお漬物だった。

時が経ち、二〇二二年の夏にある役場の方からトマトケチャッ

づくりに声をかけてもらった。このケチャップは原料を生産してくださった農業者のかたと、指導してくれたかたのおかげで見事な出来で、プレゼントした家族や友人から感激の声がかえってきた。「これってどっかで買えないの？」と尋ねる友人に「売ってないの。また作ることができたらね」と満足げに答える自分がいた。農村の一居住者らしいようで誇らしく思った。

四．商品化と自家消費、それぞれのゆくえ

筆者は六次産業化をテーマに調査研究をしてきた。そのなかで「農産加工」を事業化することの意義を考えるようになった。もともと農産加工は、加熱や乾燥を施すことで農産物の保存性を高め、作物がとれない期間に食事の栄養面を補うという役割を果たしてきた。その後、地域の女性たちが集まってできた農村女性起業等により、その技術を土台に加工品が商品化されるようになった。

長野県下のほとんどの自治体には加工施設が整備され、そこで農村女性グループが「伝統の味」や「かあさんの味」を販売してきた経緯がある。販売を目的とした農産物の加工は、農家の方々にとって収入源になる。その一方で商品化という観点で

いえば、本来の味を再現しきれないこともある。採算が見合つ材料や工程が必要とされるからである。筆者が農家さんのお家でいただいた味というのは、美味しければ美味しいほど、商品としては成立しがたい側面を持つと言える。

しかし、農産加工の技術を磨いてきた諸先輩たちが高齢化し、若い人たちが作らなくなっている今、地域の味を作り続ける加工業者は貴重な存在である。一事業者がその味を作り続けられ、たとえ各世帯で作れる人がいなくなっても、その味をつないでいくことができる。ただ、経営が成り立たないことや、後継者がいないことを理由に途絶えてしまうケースも少なくない。継承するという観点から見ると課題はたくさんある。

そこで注目したいのが、販売を目的とせず、地域の人たちが自ら食べることを目的とした加工施設の存在である。その一つとして「豊科農産加工交流センター」（長野県安曇野市）を紹介する。ここは安曇野市民であれば、誰でも利用することができる。味噌や豆腐、野菜ソース等の加工ができる。利用料は低額で設定されているが、利用に際して条件がある。一つ目に、グループ単位での登録が必要となること、そして二つ目に、加工を指導できる「リーダー」が必ず一人参加することである。

味噌づくりに適した冬場は加工施設の稼働率が最も高くなる。味噌づくりにには三日を要し、初日の午後から、中日は終日、三

日目は午前中という日程のもとで作業するグループが日を明けずに入れ替わる。取材を兼ねて味噌づくりに参加させてもらった。みんなで一つの作業をするというのは大人になってこそ楽しい。美味しい味噌をつくらうという気持ちから来る一体感是他では得難いものであった。グループのメンバーが集まるのは、年に一度の味噌づくりだけだから、近況報告が盛んに行われる。二日目の昼食時にはそれぞれが作ったおかずやお菓子を交換し合っては、どうやってつくったの?と質問が飛び合っていた。

味噌の加工には手際が肝心である。タイミングよく火からおろし、蒸かした大豆を熱いうちにつぶす。また、公共の施設ではあるが組合で管理を行っており、水道や電気代は運営費を圧迫しかねないため無駄遣いはご法度である。リーダーの平田さんから「はい、おしゃべりだけでなく、手を動かす!」と喝が入った。大人になってみんなで叱られる姿に思わず一同失笑する。

平田さんは、この加工施設が建設されることから関わってきた一人であった。当初、先輩とともに何度か豆腐作りを続けていたが、どうにも豆腐の出来に納得いかなかった。平田さんは図書館で加工の本を読み、施設の空きをみつけては、仲間とともに何度も作りに通ったという。やはり続けることでしか、上

達は見込めないのである。味噌づくりの合間に作っていただいたお豆腐は絶品であった。

商品化されることによる価値もあるが、商品化はされなくともそれぞれの家で作り続けられている「家の味」や、複数の人が集まり共同で作る「地域の味」がある。その土地に住む人たちがその地で作られた原料をもとに、自らの手で食べるものを作っていくことは、その地に住む人たちにしかできない。食の地域性や希少性ということを抜きにして「美味しいから作る」ことが味をつないでいくと感じた。

五. 「農活」という発想

農村内部に住む一員となり、こうした自給的な農の営みに関心を高めてきた。農村で暮らすことは誰もが選択できるが、「農」のある暮らしを営んでいる人は、どれほど存在するのだろうか?自分の周囲の特に若い世代は自給畑どころか家庭菜園すらしている人は少ない。多くの農村住民が、農業だけでなく、農産物の生産や加工、さらには草刈りや水路の清掃といった農的な活動に参加できていないのではないか。

このような問題意識のもとで、農村住民と「農」との関係について研究をするようになった。長野県は自給的農家の割合が

高く、田畑にも囲まれているので、暮らす人みなが農と関わっている錯覚に陥る。しかし、農村部においてさえ非農家の割合は九割以上を占めている。たとえ農家の場合にも、経済的に規模拡大が求められ、単一化が進むことで、時間的、経済的な観点から見れば自給用の農作物を生産することは非合理的なものとなり、やめることを選択するだろう。実際に筆者が調査した若手農業者の場合には自給用の野菜を栽培してはいなかった。

農家の後継者候補も会社等をリタイアするまで農業に触れない農家の後継者世代が多いが、近年は退職年齢が引き上がることでますます農業と遠のいていく。家庭菜園や小さな畑というのは、誰か一人の「城」のようなもので、家族だからといって、むやみやたらに触ると怒られる、という話も聞いた。このような実情を踏まえると、出身が農家か非農家か、親戚に農家がいるかがいまいが、地域の農業にもかかわっていないし、家の畑にもかかわっていないという農村の住民が大半であることが想定されよう。

こうした現代の農村において、「農活」の必要性を提起している。農活とは「農村住民が家族を介さずに、農を営む知識や技術を習得すること」である。従来の農家の場合には、収入源となる職業として農業を営むのが一般で、生活に必要な食料として農産物を生産してきた世帯が多かった。だからこそ、

家族間で生産する技術が引き継がれてきた。しかし、昨今の農家における農業のあり方を考えると、家族のあいだで技術や知識が継承されているとは言い難い。これを克服するためには、家の外へ出て、知識や技術を習得できる場が必要であり、そこには「仲間」の存在が必要になるのである。

六．農家ではない住民たちのチカラ

『農家と住民、力あわせて農地保全 地域一丸で未来つくる 愛媛・奥松瀬川集落』（日本農業新聞、二〇一三年九月三日）の見出しを見つけた。人口約二七〇人の中山間地集落で「若者や農家以外も巻き込まなければいつか限界がくる」と集落営農の代表の言葉が書かれている。この集落では「二〇一六年、農家以外の住民も含む地域運営組織を設立。住民が集まって話し合いやイベントを開ける交流拠点も整備した」。交流施設での会話から草刈りの話題となり、農家ではない住民が農地での植栽や草刈りに参加するきっかけになったとある。地域で仲間をつくるのが農地に関与する人を増やしたのである。

人口減少が進むなか、低密度社会をどのように維持していけるのか。多くの農村地域の課題となっているのが、農地の維持管理である。農地を資源として活用する農家が減少するなか、

活用しきれない農地が耕作放棄地候補となり、どうやって管理していくかが課題となる。農家だけでは維持していくことは困難である。

農活とは、農的活動を略したものとして捉えることもできるが、活動という単発的なものよりも、もう少し長期スパンのものとして捉えていくことで、個人の活動にとどまらず、そこに地域の農地と地域社会へかかわっていく道筋を描いていけると主張したい。農村に暮らす人々の農活のその先に、地域の農地という面的な維持、管理の可能性を期待する。農地への関与が先か、地域社会への関心が先か、今後の各地での取り組みに注目したい。

七．農村地域において農に関われる場

農地の維持・管理がこれだけ問題視されているが、農村地域に住んでいても、農に触れる機会は少ない。むしろ都会のほうが農に触れる機会は多く提供されている。都市部の高層ビルやショッピングモールの屋上にも「農園」が現れるようになった。「シエア畑」や「まちなか菜園」では道員も一通り揃っており、「手ぶらでOK」の農園となっている。休みの日に家族で行くのも良いだろうし、仕事帰りでもそのまま立ち寄ることができ

るのも魅力なのだろう。企業による手厚いサービスの市民農園がさらに普及を進めている。

このように、一般の人が野菜の栽培を自らの手で行うことができる「市民農園」や「農業体験農園」は都市住民のニーズに対応するかたちで始まった。本特集第三回でも取り上げられている農業体験農園「大泉風のがっこう」の取り組みは有名である。都市部の農家が一般の市民に野菜の栽培を指導するようになった。都市近郊で農業を継続し、農地を維持していくための手段として、また、都市住民が農を営むための手段として農業体験農園は広まった。

農村でも住民の期待から、行政やJA主導のもと市民農園（区画貸し農地）が広まりつつある。長野県内にはさらに本格的に、農業を体験し、学べる場がある。「烏川体験農場」（安曇野市）では、農業用ハウスやマルチ、農機具を用いて販売農家の規模や生産計画のもと、農産物の栽培を学ぶことができる。現在は、農家も非農家も通う場となっているが、もとは「農家のおよめさん」が花卉やメロンといった換金作物を栽培する技術を身につける研修の場として設けられたところである。農業用ハウスを複数もち、会員たちが野菜や花卉を共同で生産しており、収穫物は会員たちが持ち帰る分と合わせて、近隣の道の駅の農産物直売所にも出荷をすることで、わずかながらに会員

たちのお小遣いにもなっている。自分の家の畑に、近隣の住民を招いて野菜を生産する会員もおり、地域の農の担い手を広げることにも貢献している。今後、こうした農活の場が増え、多様なかたちで普及していくことに期待したい。

八、「農村らしい暮らし」の実現に向けて

「農村らしい暮らしとはどういうものか?」と尋ねられたことがある。今ならば、「農村らしい暮らし」すなわち「農的な暮らし」とは、自給と地産を基盤に、それらを活かせる技術を高めながら、そのモノや価値を分かち合える人との関係に重心を置いた暮らし、と答える。農ある暮らしに向き合い、少しずつでも実践を重ねていきたい。

「農村らしい暮らし」の力ぎを握るのは「仲間づくり」だと考える。農活の仲間、農産加工の仲間、資源管理の仲間、助け合える仲間・・・肩書や世代を超えた仲間との関係が、個人と地域の秘めた活力を引き出すきっかけにもなるのではないだろうか。

筆者は農村での調査をきっかけに、たくさんの人とその技術に出会うことができた。しかし、農村内部に住んでいる限りでは、出会う機会是非常に少ない。その土地に住む若い世代にこ

そ、先輩たちの技術や知識に出会って、その豊かさを共有できる仲間を増やして行ってほしい。

参考文献

- ・ 小林みずき (二〇二二) 『農村住民の農的な暮らし再出発―「農活」集団の形成とその役割―』、筑波書房
- ・ 小林みずき (二〇二二) 『六次産業化にみる農村性の構築―長野県における若手就農女性の事例から―』、『村落社会研究』〈57〉日本農村社会の行方―〈都市―農村〉を問い直す』、農山漁村文化協会
- ・ 宮城道子 (一九九六) 『農村ではじめる女性起業―もうひとつの夢づくり』、農山漁村女性・生活活動支援協会
- ・ 吉野馨子 (二〇一四) 『農村における食の自給の変容とその現状、今日的な意味の検討』『サステイナビリティ研究』四巻、pp. 61―75